

鳥居龍蔵記念博物館 NEWS LETTER

5

2024 Spring
Tokushima Prefectural
Torii Ryuzo
Memorial Museum



今回は、鳥居龍蔵と妻きみ子の写真を紹介します。写真には5人の人物が写っており、右側の2人が若き日の龍蔵ときみ子です。撮影された時期は、龍蔵が30代、きみ子が20代の頃と推定されます。夫妻はすでに、東京に居を構えており、徳島への帰省時に撮影された写真と考えられます。ドレスアップした洋装が印象的です。他の3人の人物は、おそらく親族と思われますが、詳細は今後の検討課題です。

(小林篤正)

今季の逸品

鳥居龍蔵ときみ子の写真

文化の森総合公園

徳島県立鳥居龍蔵記念博物館

資料で たどる、鳥居龍蔵の学問と生涯

第5章 北東アジアでの調査と「固有日本人」の発見

鳥居龍蔵の調査対象地域は、20歳代後半から30歳代前半に連続して行われた台湾や中国西南部の調査の終了とともに、中国東北部・内モンゴル、朝鮮半島、シベリア東部など、北東アジア方面にシフトしていきました。特に、当時「満蒙」と呼ばれた中国東北部・内モンゴル



南満州で調査を行う鳥居龍蔵

は生涯で最も多く足を運んだ地域であり、ここでの調査の成果は、後年、彼の重要な研究テーマとなった日本人の起源をめぐる学説を形成するのに大きな役割を果たすこととなります。鳥居はこの地で、日本人の祖先の主たる構成要素となった人々を発見し、これを「固有日本人」と名付けました。今回は、この「固有日本人」の確認にいたる経緯について概観したいと思います。彼はいかにして、北東アジアに起源を持つ人々の日本列島への移動に気づき、独自の学説を形成していったのでしょうか。その故地とされる中国東北部・内モンゴルや朝鮮半島の調査から、学説形成の様相を確認していきましょう。

鳥居の満州・内モンゴルでの調査は、前後14回にも及びますが、「固有日本人」との関係からは、特に第1回から第4回までの初期の調査が重要です。第1回は、1895（明治28）年に日清戦争の結果、清国から日本に割譲された遼東半島における調査です。鳥居にとって初めての海外

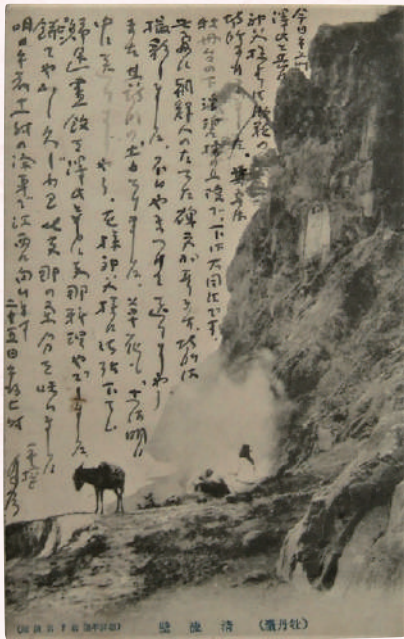
調査であり、言語の通じないなか、ひたすら歩き回ったといえます。その過程で確認したものの一つが、熊岳城で採取した石槍、石斧などの石器であり、これが満州における「石器時代の発見」となりました。

第2回調査は、その10年後、日露戦争に伴うポーツマス条約の締結直後に行われています。その調査内容は多岐にわたりますが、特に普蘭店近郊の鍋底山山麓での調査が注目されます。この地域からは、石器とともに大量の土器の出土を確認するのですが、その形態や文様は、日本で出土する縄文土器とは、全く異なる別派のものでした。これが、鳥居が後に提唱する「固有日本人」の使用する「土器の発見」となります。第3回調査として、1907年～1908年にかけて、妻と長女とともに内モンゴル調査に従事した後、1909年に3度、遼東半島から満州方面を訪れたのが第4回調査です。旅順近郊の老鐵山を振り出しに、先述の普蘭店や熊岳城等を再訪し、多くの石器、土器を採集しました。その



『南満州調査報告』に添付された
土器文様のパターン図

成果は、翌1910年に刊行された『南満洲調査報告』にまとめられました。そこには、満州石器時代の土器紋様は直線を基本とし、それに円や四角、三角などが交叉した幾何学的な紋様をなしていること、そしてそれが、日本で出土する「弥生式土器」（現在の弥生土器）の紋様と一致することへの言及がみられます。満州と日本列島に見られる「土器の類似」に関する初めての指摘であり、これらの遺物の間に、何らかの民族的なつながりがあるとの推測を示したのです。



鳥居が朝鮮半島調査時に妻・きみ子に宛てた絵はがき

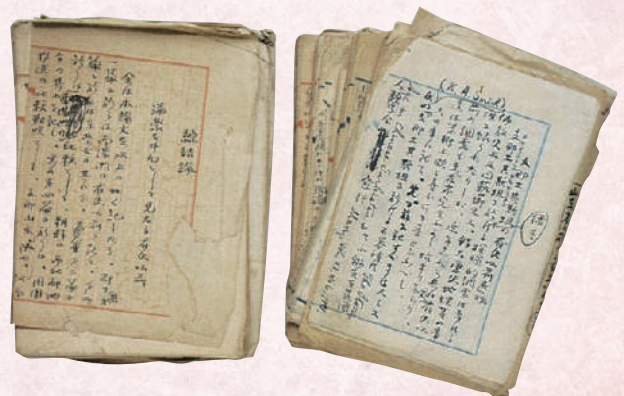
以上の、満州方面での初期の調査によって得られた推測を、実証レベルに引き上げていったのが、1910年以降、1916（大正5）年まで、朝鮮総督府からの委嘱を受けてほぼ毎年実施された朝鮮半島調査です。その成果には、朝鮮の石器時代には、日本のような「縄紋式石器時代」が存在しないこと、また一方で、朝鮮半島出土の土器と日本の「弥生式土器」とは深い関係があるとの認識が明瞭に示されており、この時点で彼の日本人起源論、すなわち「固有日本人」論の骨子が固まりつつあったことが分かります。

鳥居の朝鮮半島調査の正式な報告書は、諸般の事情で、第5回調査に関する『平安南道・黄海道古蹟調査報告書』を除いて刊行されていません。この報告書が、当時の様子を具体的に把握する数少ない手がかりとなりますが、その記述は、遺物、遺構単位でまとめられたものであり、時系列に調査行程を追うことは出来ません。従来から、

調査期間中に、鳥居が人類学者・石田収蔵（1879 - 1940）宛てに現地から送った8通の絵はがきが具体的な行程を知る縁となっていました。そのようななか、近年の当館における資料整理の過程で、同じ時期に鳥居が妻のきみ子宛に投函した37通の絵はがきが確認され、先の「石田宛書簡」と合わせて、調査の詳細な行程が把握できるようになります。

満州・内モンゴル及び、朝鮮半島調査の石器時代に関する鳥居の調査成果は、論文「満蒙の有史以前」に結実します。この研究により、鳥居は文学博士の学位を授与されるのですが、論文自体は関東大震災の混乱の中で滅失しており、その概要が伝わるのみです。一方当館には、「失われた学位論文」の草稿の一部が存在しています。その内容の確認と検討が今後の課題となっているのです。

（石井伸夫）



「満蒙の有史以前」の草稿の一部

遼代の白磁資料

当館では、鳥居龍蔵が収集したと考えられる、遼代（916 - 1125）の陶磁器の破片を所蔵しています。写真1の白磁輪花皿、白磁刻花蓮弁碗などがその一例です。ただ、これらの白磁片には、発見された場所や経緯等の記録がありません。そのため、手がかりを求めて、鳥居の著作物を確認しました。

まず、白磁に関する写真を確認すると、鳥居が1936（昭和11）年に刊行した『考古学上より見たる遼之文化 図譜』（以下、『図譜』）第2巻の第116図版「遼の慶州城^{けいしゅうじょう}磚塔内に残存せし定窯破片」（写真2）があります。この図版に掲載されている白磁片と、

当館所蔵の白磁片を照合したところ、1点を除き全て同一資料であることが判明しました。これらは、『図譜』の説明によると、遼の慶州城（中国・内モンゴル自治区赤峰市所在）にある磚塔（写真3、白塔と呼ばれる）の内部で採集されたようです。

また、鳥居が1937年に刊行した『遼の文化を探索』の記述によると、1933年の白塔調査時に見た白磁片の特徴として、非常に薄手で、魚や花などの図柄が認められたようです。この記述も、当館所蔵の白磁片の特徴に似ています。

以上の検討から、当館所蔵の白磁片は、鳥居が調査した慶州城の白塔に関する、遼代の貴重な資料であると考えられます。（下田順一）



10～11世紀の東アジア



写真1 当館所蔵の白磁の皿や碗



写真2 『考古学上より見たる
遼之文化 図譜』



写真3 遼の慶州城の白塔

龍蔵を巡る人々 一 碩学と社会の インターフェイス



晩年の笠井新也

かさ い しん や 笠井 新也

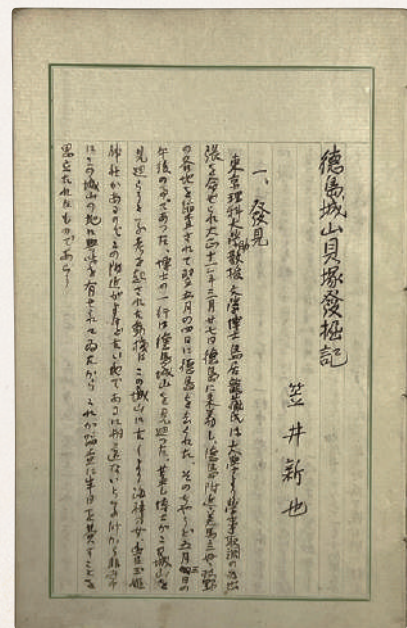
笠井新也（1884 - 1956）は、美馬市脇町出身の教育者、考古学者、古代史家、郷土史家。弟に、郷土史家として著名な笠井藍水（1891 - 1974）がいます。

笠井は脇町で小学校から中学校まで学び、1902（明治35）年に上京して国学院に進みました。1906年に卒業した後は、徳島県、長野県、大阪府で教職に就くかたわら、考古学と民俗学の研究を重ねました。1915（大正4）年には退職し、各地を巡歴しながら研究を深めていきますが、翌年、東京帝国大学の聴講生となり、鳥居のもとで学びます。もっとも、当時の鳥居は朝鮮半島調査に没頭しており、期待したほどの指導を受けられなかったようです。

1917年、笠井は帰郷して脇町中学校（現 脇町高等学校）に勤めるようになり、さらに1921年からは徳島県史蹟名勝天然紀念物調査会委員に就き、文化財の調査・保護にも従事します。帰郷後の研究は、民話・伝説などの民俗、邪馬台国の考古学・文献史学的研究が中心で、後者については全国的にも注目されました。

1922年3月下旬から4月初めにかけて鳥居が徳島を訪れ、三好・美馬郡から板野郡、小松島にわたる遺跡調査を行った際、笠井は森敬介や前田正一ら鳥居と親しい郷土史家たちとともに同行しました。最終日の4月3日、徳島城跡を訪ねた一行は、城山貝塚を発見します。徳島にはないと思われていた縄文遺跡の発見という「大事件」で、4月後半から5月にかけて、鳥居を中心に本格的な発掘調査が行われました。笠井も参加し、調査記録や後年の所感を含む「城山貝塚発掘記」を遺しています。そこには、学界の権威であった鳥居の意見を鵜呑みにせず、冷静に遺構・遺物を検討する姿がうかがえます。

現在、徳島県立博物館に、この「発掘記」や、戦後にまとめられた「阿波伝説誌」、「邪馬台国及卑弥呼研究」という膨大な未刊原稿、旧蔵書などが収蔵されており、笠井の研究を今に伝えています。（長谷川賢二）



「城山貝塚発掘記」
（徳島県立博物館蔵）

東京大学総合研究博物館が所蔵する 台湾考古資料の調査

東京大学総合研究博物館（以下、東大博）には、鳥居龍蔵が収集した資料を含む台湾考古資料が収蔵されています。東大博では所蔵資料の目録となる「標本資料報告」を刊行しており、鳥居が各地で行った調査で撮影した写真資料については、「東京大学総合研究資料館所蔵 鳥居龍蔵博士撮影 写真資料カタログ」に収録されています。しかし、台湾考古資料については未刊であるため、詳細がわかっていません。

当館では、鳥居の台湾調査について、国立台湾史前文化博物館（以下、史前館）と連携協定を結ぶなど、国内外の関連機関及び研究者と共同研究を行っています。共同研究を進める上で、東大博の台湾考古資料の詳細を明らかにすることが大変重要であるため、当館学芸員、海部陽介氏（東大博）、野林厚志氏（国立民族学博物館）、宮岡真央子氏（福岡大学）、高島芳弘氏（当館元館長）、陳有貝氏（国立台湾大学）、葉長庚氏・王仲群氏・曾于宣氏（史前館）といった日本・台湾の研究者が共同で資料調査を実施することになりました。

2022年11月と2023年6月に、資料の種類や点数を把握するための予備調査を日本側で行い、総点が1,200点以上あること、石器・石製品、土器・土製品、動物遺体などが収蔵されていることを確認しました。

2023年8月には、日本・台湾の研究者が参加した最初の本格調査を実施しました。この調査では、まとめて収蔵されていた石器およそ500点について、日本の研究者が資料への固有番号の付与、写真撮影、法量計測、注記内容の記録・解読などを行い、台湾の研究者が、資料名称や用途・石器石材を特定するなど、台湾考古学の基準に則した調査や評価を実施しました。

現状は、8月の調査対象資料の分析とリストを作成している段階です。未調査の資料がまだ多く残っていますが、東大博所蔵資料の実態解明に一步進んだと言えるでしょう。当面は引き続き調査を行っていく予定です。

（植地岳彦）



東京大学総合研究博物館での調査風景



資料調査をする陳有貝氏ら

台湾・内文旧社見聞記



台湾、屏東県獅子郷の位置

筆者を含む当館の職員3名は、2023年12月4～8日に、台湾を訪れました。その主な目的は、かつて鳥居龍蔵が調査した台湾先住民の集落跡に行き、国立台湾史前文化博物館（以下、史前館）と共同で現地の状況を調査することでした。当館は2022年9月に史前館と連携協定を結び、2023年2月に台湾で共同調査を行いました。それを受けたものが、今回の台湾訪問です。

今回の調査対象は、屏東県獅子郷の山地にある、内文旧社という場所です。ここにはかつて、台湾先住民の一つである、パイワン族の人々が暮らしていました。同地に住んでいた人々の子孫は、現在では山から降り、麓の集落で生活しています。現地調査は6日から7日にかけて行いました。以下、調査の概要を紹介します。

6日の午前中に、内文旧社がある山の麓へ行き、そこにある集落のゲート前で、入山のための儀式が行われました。儀式を済ませた後、自動車で登山道の入口まで進み、そこから本格的な登山が始まります。私たちが通った山路の大部分は、山肌へべりつくようなものであり、中にはロープを頼りにして進んだ場所もありました。

内文旧社に到着した後は、遺構や遺物を確認する作業へと移りました（写真1）。現地にはパイワン族の住居跡だけでなく、警察署や学校の跡地、神社跡、貯水槽跡など、日本統治時代の面影を伝えるものもありました。調査後、6日は現地で野宿し、7日の午前も継続して調査を行い、夕方に下山しました。

鳥居龍蔵のフィールドノートには、彼が調査時に会った台湾先住民の生活などが、挿絵を交えて記録されています（写真2）。しかし彼が調査時に通った道については、なかなか記録には残りません。今回の台湾訪問によって、鳥居が遺した記録に現れるものだけでなく、彼がどのような道をたどって調査地に赴いたのかも確認できました。フィールドワークで得た経験を、鳥居のフィールドノートの解読に活かしていきたいと思います。（坂東 泰）



写真1 内文旧社での調査風景

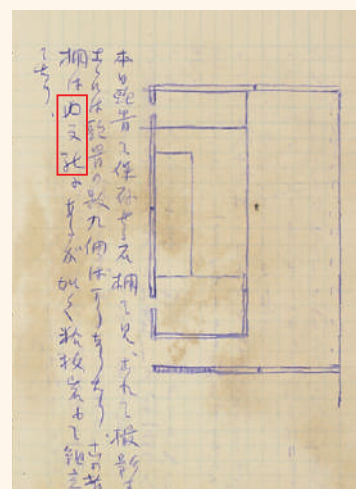


写真2 鳥居龍蔵のフィールドノート「たかさごのたびー」
赤枠の箇所に「内文社」とある

鳥居龍蔵記念博物館の 展 示 ・ 普 及 行 事 について

当館が令和5年度の下半期に実施した主な行事と、令和6年度の予定をお知らせします。

＊

企画展「台湾世界を行く －鳥居龍蔵の見た海・山・ひと・ムラー」 (令和6年1月27日～3月3日)

鳥居龍蔵は1896年から1910年にかけて、5回の台湾調査を行いました。その関連資料は現在、日本国内の数カ所に分散して保存されています。本企画展では、それらの資料を一堂に集め、鳥居の台湾調査の全容を紹介するとともに、その足跡を再現しました。



企画展会場の様子

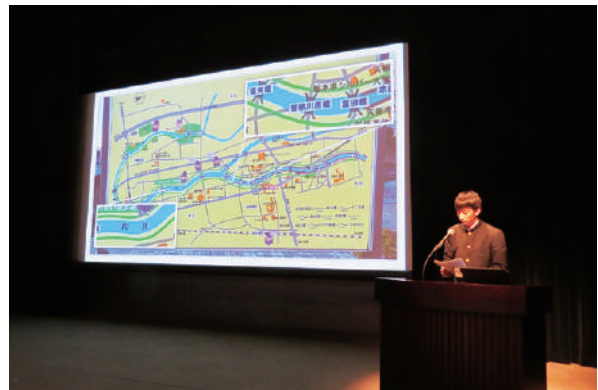
///

鳥居龍蔵記念 徳島歴史文化フォーラム (令和6年2月17日)

徳島県内の中学生と高校生が、歴史・文化に関する自主研究を発表し、優秀作品を表彰しました。

鳥居龍蔵記念 全国高校生歴史文化フォーラム (令和6年2月18日)

全国の高校生から歴史・文化に関する自主研究を募集し、一次審査で優秀賞を受賞した3組と徳島フォーラムの優秀賞受賞者が研究発表を行い、最優秀作品を表彰しました。



全国高校生歴史文化フォーラムの様子



- 鳥居龍蔵セミナー
(令和6年5月26日、6月23日、7月28日、9月29日、12月15日、令和7年1月19日 [日])
- みんなで発見！！鳥居龍蔵を知ろう！！(8月4日 [日])
- 企画展「モンゴルのフィールドワーカー鳥居きみ子(仮)」
(11月2日 [土]～12月8日 [日])
- 企画展記念講演会(11月24日 [日])
- 鳥居龍蔵記念 徳島歴史文化フォーラム (2月15日 [土])
鳥居龍蔵記念 全国高校生歴史文化フォーラム (2月16日 [日])
- 鳥居龍蔵ゆかりの地を歩こう(3月16日 [日])

※詳しくは当館ホームページをご確認ください



鳥居龍蔵記念博物館 NEWS LETTER No.5
発行年月日 2024年3月20日
編集・発行 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館
〒770-8070 徳島市八万町向寺山(文化の森総合公園内)
TEL 088-668-2544 FAX 088-668-7197
<https://torii-museum.bunmori.tokushima.jp>